

2024 年度活動助成 活動実績報告書

団体名	阪神大震災を記録しつづける会
活動テーマ	阪神・淡路大震災から「30 年目の手記」の募集と活用




 阪神・淡路大震災から
 30年目の手記

- 30年目の手記について
- 手記を読む

それまで出会ったこともなかった人たちが不思議な縁で結ばれた ¹⁾ にわかジャーナリスト集団 ²⁾	テラシの裏をメモにして、道を尋ねる人々に地図を即座に書いて渡している。
巨大な怪物の背中から振り落とされるような激しい揺れが続き、現実であることを自覚しました。	10年ぶりだろうか。当時のスケジュール帳にある電話番号に思い切ってかけてみた。
私は今年能登大地震の余波を経験しました石川県加賀市から一筆を	ありと凡ゆる野菜が下処理されてゆく。生きているという事は素晴らしい事だ

阪神・淡路大震災から 30 年を迎えるにあたり、震災を直接経験した人々だけでなく、当時を知らない世代や遠く離れた地域の人々も含め、幅広く「震災の語り」に触れ、書き継ぐ機会をつくりたいと考え、「30 年目の手記」の募集と公開を企画した。語り継ぎの担い手の高齢化が進む中、震災体験を受け取る世代がどのように「自分の言葉」を持つのかを探ることが、本活動の動機である。

2024 年 1 月 17 日から 12 月 17 日までの間、神戸市内のデザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) を拠点とし、ウェブ応募フォームおよび郵送で手記を募集。1200 字以内の震災にまつわる手記であれば誰でも応募可能とし、若い世代や他災害の被災者など、186 篇が寄せられた。編集・校閲を経て、125 篇を特設ウェブサイトで公開。公開に先んじて一部を早期掲載することで、読んだことがきっかけで書くという循環が生まれた。手記は KIITO 内展示やメディア発信とも連動させ、社会的にひらかれた語りの場を育てている。

また、記録・表現に携わる実践者を招いたレクチャーやワークショップを開催。これらによって、災害が多発する時代における災害経験の継承に必要な手法と感性を、多世代で共有する方法を練り上げていく実践を生み出した。